

ニッセンケン分室「思いつきラボ」No. 128

三味線の絃(ゲン)は 絹糸からつくられている・・・



2019年になりました。また新しい年を迎えることができたのですが“平成”は4月30日までとなり5月1日からは新しい元号となります。“平成”という時代の区切りを迎えるということでいつもの年とはなにか違う感覚があります。元号が変わるという出来事に立ちあえるのも貴重なことに思われます。今年は新年が2回あるような感じになってます。思いつきラボも6回目の正月を迎えました。本年もよろしくお願いいたします。



正月早々の出来事ですが交差点で信号待ちをしていると不意に空から自転車が落ちてきて胆(きも)を冷やしました。空から実際に降ってくることはないですが廃品回収のトラックか引越で荷物を積んでいたトラックからか分かりませんが荷物を固定する紐が切れたか外れたかで自転車が飛び出てきたのです。冷静になってみると筆者は被害に合う位置には立っていませんでしたので問題はなかったのですが正月のいろはガルタの“犬も歩けばなんとやら・・・”で一步外に出れば何が起こるか分からないという体験をした新年のスタートとなりました。

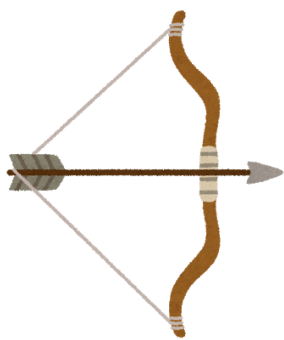
和楽器の絃(げん)

筆者は普段あまりテレビを見ていないのですが正月は家に居る時間が長いのでテレビをつけっぱなしにしていると思わぬ番組に目を惹かれることがあります。旅番組のような内容でしたが滋賀県長浜の紹介で和楽器の絃(げん)を作っている様子が映しだされていました。三味線や琴の絃が絹糸からできていることは知っていましたがその生産の工程は全く知らず興味深く見ることができました。とくに“独楽撚り(こまより)”と呼ばれる工程は柄の長い独楽に絹糸の先端を結んでその長い柄を職人さんが手で回して撚りを掛ける作業で均一な品質にするにはかなりの熟練が必要なんだろうなと思いついて見入ってしまいました。

また三味線の絃は黄色のものが多いのですがその染め工程も紹介されていて“ウコン”で染められていることを知りました。調べてみると昔の繭は黄色味がかかったものを使用していたようでその名残で三味線にする糸は黄色く染めているとのことでした。白い三味線の絃もありますので全てを染めているわけではなさそうですが三味線も種類や流派によって使い分けられているのかもしれませんがちなみに琴の絃も絹糸ですがこちらは白色が主流だそうです。かなり詳しい紹介が成されていたのですがいずれにせよこの里で伝統的な工法で和楽器の絃が作られていることが素晴らしいことです。もちろんナイロンやポリエステル糸もありますが化学繊維が世に出回るまでは天然の素材でつくられていたのですから和楽器の本来の音色(ねいろ)は絹糸が奏でる音ということになります。



西洋の楽器でも・・・



日本だけでなく西洋の楽器でも化学繊維や金属繊維ができるまでは天然素材を使っていたはずなので調べてみると 歴史的にギターの原型となった楽器は古代の壁画や彫刻から紀元前 3700 前には存在していたといわれていて 化学繊維はもちろん金属繊維もない時代でした。ツル植物のツルを張っていたものと考えられています。ちょっと話は逸れますが楽器の 先祖は“弓”と言われていて狩猟の道具として弓を使い初めて 矢を放つ時に響く音から発展したと考えられているそうです。弓の長さやツルの太さで音色は違ってくるので興味を持った人間が遊び始めたのだと思います。

また話は逸れますが 音階を考えたのは古代ギリシャの数学者 ピタゴラス・・・あのピタゴラスの定理を発見した数学者です。ということで数学の本にはよくでてくるのですが 1本の弦の 1/2 を押さえると 1オクターブ高い音になることに気付き また 2/3 の位置を押さえると 5度高い音になることと重ねて音を出しても心地よい組み合わせであることを発見したのです。最初の音を“ド”とすると 5度高い音は“ソ”になります。こうして 5度ずつ上げてピアノ音階の基になる「ドレミファソラシド」の原型は紀元前 500 年に発見されていたのです。

ということで西洋楽器のギターの先祖の弦の話に戻りますが 植物のツルから麻が用いられた記述もあるようですが 16 世紀には今のギターに近いものに発展してきました。この頃にはギター弦には“ガット”と呼ばれる羊の腸を削って作られた弦が使われていたようで クラシックギターで“ガット・ギター”としていまでも名前は残っています。ちなみにテニスラケットのガットもこの羊の腸からつくられています。いまでも「ナチュラル・ガット」の名称で販売されているそうです。西洋では絹糸がポピュラーではなかったので動物由来の弦は羊の腸が主流となったということです。



今年最初の思いつきは絹糸

今年最初の思いつきラボは「こんなところにも絹糸が・・・」という感じで原稿にしてみました。テレビもいい番組があります。話があちこちと飛んで・・・いつものことですが・・・まとまりのわるいものになりました。これも思いつきですが和楽器を調べていると「絃」で西洋楽器では「弦」という漢字が使われていたので今回の原稿では使い分けしてみました。いろはガルトという言葉もでてきましたが ここ数年は子ども達が正月に遊びに来てカルトをやっている光景を見ることもなくなりました。正月ならでは・・・といった遊びも変わってしまいました。和楽器の絃作りのように時代に流されずに伝統を守ることはだいじなことです。いろはガルトも忘れてしまいそうなのでおさらいしておきます。

“犬も歩けば～猫も歩く”・・・(それじゃことわざにならないでしょ!!)

原稿担当：竹中 直（チョク）